



〈こんな所で学びたい〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

ニューヨーク公共図書館(NYPL)

は、マンハッタンの繁華街の角のわたりやすい場所にある。観光の名所でもあるそうだが、私は何度NYに来てもいつも素通りしていた。この映画を見て、これまで一度も入ってみなかったのは実に勿体なかった、と悔やまれる。「世界で最も有名な図書館」の一つで蔵書の総数六千万点というのもすごいけど、何より「これが図書館!」と驚くほどに、その活動は多彩で豊かで面白い。

NYPLは、一九世紀初頭の建築である荘厳な本館を含む四つの研究図書館と地域に密着した八八の分館を合わせた九二の図書館ネットワークで成り立つ。NYに在住または勤務している者は原則誰でも無料で利用できる。財政基盤は市の出資と民間の寄付で成り立っているので、P11パブリック」とは「公立」ではなく「公共(一般公衆に開かれた)」の意味である。

大きな壁画や窓、高い天井からはシャンデリア、大理石の床や階段。ほぼフットボール競技場の長さをもつ巨大な閲覧室。がっしりとした大きな机の上にはクラシックな読書灯がゆったりと間隔をとって並んでいる。閲覧室は雑誌、地図類、美術関連、点字・録音本図書館、黒人文化研究図書館などさまざまあり、じっくりと好きな本を心ゆくまで楽しめる。

だが、NYPLの魅力はそれに止まらない。「図書館は本の置き場ではない。図書館とは人」とある担当者は言う。図書館での催しを通して人と人が出会い、作り出す知のコラボレーションの見事さ。ベストセラー著者によるトーク企画。電話での問い合わせに答えてくれるサービス。例えば、ユニコーンに関する質問を受け付けた司書が、文献を詳しく調べて教えてくれる。これは、年間約三万件の問い合わせがある名物

サービスだという。他にも、アーティストによる演奏会、子どもたちへの美術教室、シニアのダンスクラスやパソコン指導。就職支援プログラムでは消防署、建設現場、公共図書館、医療センター、軍隊などの現場のプロたちが、仕事について体験に即して説明する。点字・録音本図書館では、点字の打ち方や読み方をボランティアが指導する。障害者のための住宅手配サービスも。

カメラは、さらに観光客は決して入れない、図書館の舞台裏に入ってゆく。ハイライトは、幹部らの活発な会議だ。公民協働のこの図書館の予算をいかに確保するか。デジタル革命への対応、ベストセラーが残すべき本か。紙の本か電子本か。ホームレスの問題にいかに向き合うか…。

世界で最も有名な図書館にも、悩みは尽きない。デジタル化が進めば、図書館は不要になるとの声もある。だが、NYPLの提供しているこれらの幅広く重要な文化・教育プログラムは、「今後、学びたい、アイデアを分かち合いたい、情報を得たい、能力を高めたいと考える人々が行きたい場所であり続けるだろう」とワイズマン監督は語る。実際、図書館は面白い、こんな風に使えば。上映時間二〇五分は長くない。



『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』

アメリカ映画 (205分)

監督:フレデリック・ワイズマン

公開中